

i P o d = アイポッド

西麻布の仙人は補聴器をつけている、と言われましたが、補聴器ではありません。補聴器を頼りにしている難聴の方には申し訳ないが、i P o dを使いこなせるようになって、意気揚々としているときに、補聴器？と言われてずいぶんガックリきたものです。

ウォークマンの第一世代が誕生したのが1979年、松柏堂医院のスタートと同年です。携帯電話のはしり、自動車の移動電話の実用化も1979年でした。街を歩いている人々が、電化小道具を携帯するようになった元年です。

まずウォークマン。若い人がイヤホンを挿したり、ヘッドフォンを被ったり。傍から見てみると、電車のなかで、足でリズムをとったり、身体全体を揺らしたり・・・場所が違うだろうに。外にジージーと音が洩れたりするのは論外、思わず睨みつけたものです。

私の子供時代～青春時代には、一家に一台あればいい方だった、ステレオ装置と電話。それがいまや一人々々が持参している。だいたいヘッドフォンなんて、深夜放送をそっと聴くための小道具。それを外にまで持ち出して、昼間から、現実の騒音（両親や教師の小言・友達のイジメ）をよそに、スタジオの音楽と繋がっている。

ヘッドフォンは、1985年に発明されたコトバ「オタク」文化、やはりその頃一般的になったコトバ「自閉」の象徴だな。

ヘッドフォンで覆われた耳は、まさに「聞く耳を持たない」です。現実の話を直に、ナマで「聞く耳を持たない」。

ウォークマンとも携帯とも長いこと縁のなかった私ですが、はじめて購入したのは、i P o d。昨年春、脳血栓で入院したのがキッカケ。友人が差し入れてくれたのは、i - P A D。グールドの演奏するバッハのピアノ曲が沢山入ったのを、置いていつてくれたのです。なにかと心乱れる入院生活の間、消灯後に音量（怨霊！）を下げた聞くバッハは胸に沁みました。

老人にも仙人にも、そして病人にも、音楽が必要だ！！

PCの機能は要らない、音楽だけ聴ければよい、と購入したのがウォークマンの発展形 i P o d です。はじめはワイアレスの耳掛け式イヤホンを求めまし

た。上着のポケットにせよ、ウエストポーチにせよ、ワイアレスだと着脱のとき神経を使わなくて済む、と思ったからです。そうか、そのときでしたね、補聴器と間違えられたのは！！

耳掛け式にしたのは、私の耳穴は、挿入式のイヤホンに合わない。これは畑の草刈作業中、草刈り器の騒音対策に耳栓をするのだが、片方だけがいつも抜けて紛失するので実証済み。耳掛け式は、ヘッドフォンに較べれば大袈裟感も内向き感もずっと少ない。

でもね。ワイアレスは、安定性に欠ける。送受信がうまくいかず、うまく聞えるとホッとする始末。これでは使えない。2～3ヶ月でワイアありに交換。

ソフトの方、内容は何を聴いているかといえば、ポピュラーでもクラシックでもなく、中心は邦楽。それも長唄です。

長唄は名人達が録音したものが、レコード時代からいろいろあって、「伊十郎全集」「長唄の美学」が中心。これだけでもCD100枚は超える。さらに長唄は元々歌舞伎の伴奏音楽ですから、舞台の袖で音を出す、いわゆる「黒御簾（くろみす）音楽」を集めた全集がある。

もうひとつの柱は落語。レコード時代からの私のコレクションは筋金入り。CD版を買わないで、レコードをCDに直してiPodに入れる。CDになったからのコレクションも多くてたがいまiPodに入れている最中。

こうして、立派なウオークマンになった私が誕生しました。まさに若者化、若返り、リボーンです。とくに自転車の通勤には最適。神宮外苑から青山霊園を通る通勤途上はルンルン。耳掛け式イヤホンはヘッドフォンと違って、外の現実の音はそのままはっきり聞えるから、自転車に乗っていても危ないことはありません。

電車の移動中は長唄のリズムに合わせて身体を揺らしている私。落語を聴いていて思わずニヤリとして、前に座っている人と視線があってしまい、とても恥ずかしい私。地下鉄の騒音にかき消されがちになると、ついボリュームを上げる私。そうすると音が外部に洩れるらしく、隣の人視線を浴びる私。

いやー、若者たちに、ようやく追い付いたよ！！

なに、いまや 아이폰 の時代？ 若者たちは忙しげに指を滑らせています。

最近、私たち老人が使っている携帯のことを、ガラケというと聞きました。「ガラパゴス携帯」すなわち「携帯の化石」というのだそうです。先生はもう追い付かなくていいよ、とも言われましたが・・・。

——以下次号——



## タイチーセンス 61

### 太極拳は水中で戦う武術だった？ その1

世の中には大多数の人達が当たり前だと思い込み、疑うことなく従っている共有原則と言うものがあります。しかし、当たり前だと思っている事でも改めて「なぜ？」と問われると、正確な理由が分からなかったり、あいまいだったりする事があります。

そして時には正しいと信じていた事が間違いだったり、間違いだと思っていた事が正しかったりすることもありうるのです。

太極拳の世界にも、この共有原則が沢山あります。太極拳と言えばゆっくり動くのが最大の特徴ですが、なぜゆっくりなのか？という理由を誰もが納得できる形で明確に説明するの意外と難しいのです。

「本来は早い動きだったのだが健康法になってゆっくりになった」

「最初はゆっくり動くが、上達すると早い動きになる」

「気を練るためにゆっくり動く」

「繊細な力の使い方を意識するためにゆっくり動く」

他にも色々な理由が述べられ、暗黙のうちに了解されています。

しかしこれらの説明は、ゆっくり動く事の効果や効能の説明だったり、本来はゆっくりではなかったのだ、と逆に否定するものだったりして、ゆっくり動くことの明確な根拠としては説得力に欠ける気がします。

実際に太極拳をやっている人達は「太極拳はゆっくり動くものだ」という共有原則に従っているため納得しているようですが、他の武術やスポーツなどをやっている人にこれらの説明をすると理解されないことが多いのです。

太極拳はなぜゆっくりなのか？

これまでの太極拳の常識を覆す、驚くべき理由を紹介しましょう。それは「太極拳は水中で戦う武術だった」というものです。

水中で動くのですから水の抵抗を受け、当然動作はゆっくりになります。練習している型の動きは、水中での動きをイメージして地上で練習しているということになるのです。

そんなバカな話があるものか？と思うでしょうが、意外とこの説は辻褄が合うのです。

今回はこの説を検証してみましょう。 —以下次号— 太極拳：奈良英治

